

事業名	令和5年度ワカメ養殖概況（増養殖技術研究）
予算区分	県単
事業実施期間	平成12年度～
担当者	（環境増養殖担当） 棚田教生
共同研究機関等	

<目的>

令和5年度の徳島県内のワカメ養殖の概況及び種苗の有償配布状況についてとりまとめる。

<結果>

種苗生産～育苗

海面での育苗は概ね10月下旬以降に開始された。小鳴門海峡に位置する水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水温が育苗開始目安の23℃を下回ったのは平年より5日遅い10月28日であった。その後も11月1～3日まで3日連続で夏日を記録するなど高気温の影響により、育苗期の水温は11月中旬までやや高め～高めで推移した（図1）。しかしながら生産現場では、種苗不足や種苗供給時期の遅れ等の影響は特に認められなかった。

本養殖

播磨灘の北灘沿岸では例年と同時期の11月9日から種付け作業が始まった。その後小鳴門海峡、紀伊水道沿岸でも順次行われた。北灘沿岸では1月末から収穫が開始された。水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水温は年末から平年より高めで推移し、その傾向は3月中旬まで長期間継続した（図1）。特に2月中旬（14～20日）は季節外れの記録的な高気温が続いたため、通常は年間最低水温を記録する時期にもかかわらず水温が大きく上昇した。この特異的な現象も影響し、本漁期は期間を通じて10℃を下回らない高水温年であった。

食害

昨年度は鳴門海域においてかつてないほどの食害が発生したが、今年度は比較的被害は少なかったとの声が多かった。しかし小鳴門海峡の鳴門庁舎前の試験漁場では、例年であればワカメが大きく生長する年末年始の期間に水温が低下せず、明瞭な食害が発生した。また設置したタイムラプスカメラにはクロダイが2月下旬まで継続して撮影された。

色落ち

播磨灘、小鳴門海峡、紀伊水道北部の漁場では、1月下旬までは2μg-at/L以上のDIN濃度が維持されていたが、2月に入ると県内全域でDIN濃度は低下し、2μg-at/L以下の状態が継続した。この影響で播磨灘と紀伊水道北部の漁場では2月中旬頃から色調の低下が見られ、1週間ほど色落ちが発生した。しかし2月下旬の寒波（波浪）と降雨等により2月末以降色調は回復した。一方、紀伊水道南部では3月以降2μg-at/Lを上回ることが多く、近年では高い栄養塩環境であった。和田島地区で3月から収穫を始めた漁業者3名への聞き取り情報では、今漁期は色落ちの発生はまったくなく、近年にはないほどワカメの色は良好とのことであった。全体的には、本漁期は色落ちの発生・被害は軽微な年であった。

生長・品質及び生産量

高水温等の影響でワカメの生長は例年より遅れたが、3月中旬以降は水温が平年並みに推移し

たこともあり、漁期後半の生長は回復した。このため3月前半で収穫を終了した播磨灘の漁場では例年と比べて生産量が2割程度減少したということであったが、4月まで収穫した漁場では持ち直した。全体的には生産量は例年と比べて減少したという声が多かった。

紀伊水道北部の鳴門町漁協の漁場では、収穫を開始した2月10日頃からワカメの根が崩れてロープから脱落する現象が多発し、生産者からは収穫量が減少したとの声が寄せられた。この現象は例年3月中旬以降に発生するものであるが、収穫開始時期からの発生は初めてで特異な現象とのことであった。本件の詳細については、別途報告したい。

ワカメ種苗の有償配布

高水温耐性株「鳴門椿」の配偶体を、3漁協の11名に配布した。また鳴門椿の色調面を品種改良した「新鳴門椿」の試験用種苗を8漁協の21名に配布した。これら新旧の「鳴門椿」種苗の本養殖における利用者は、8漁協の計29名であった。

<次年度の計画>

継続する。

<結果の発表・活用状況等>

特になし。

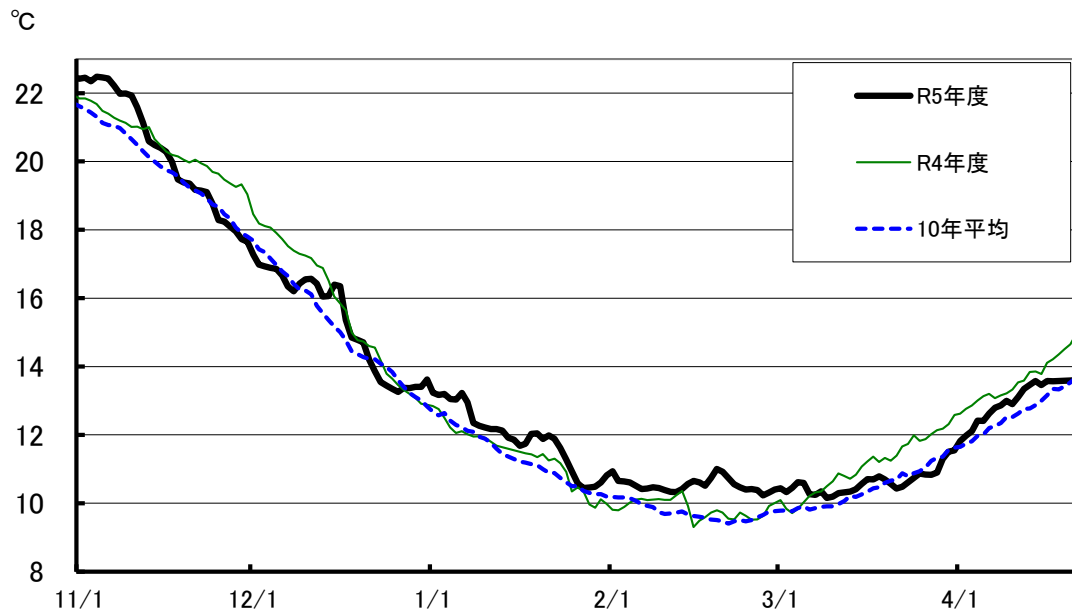


図 1. 水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水温の推移

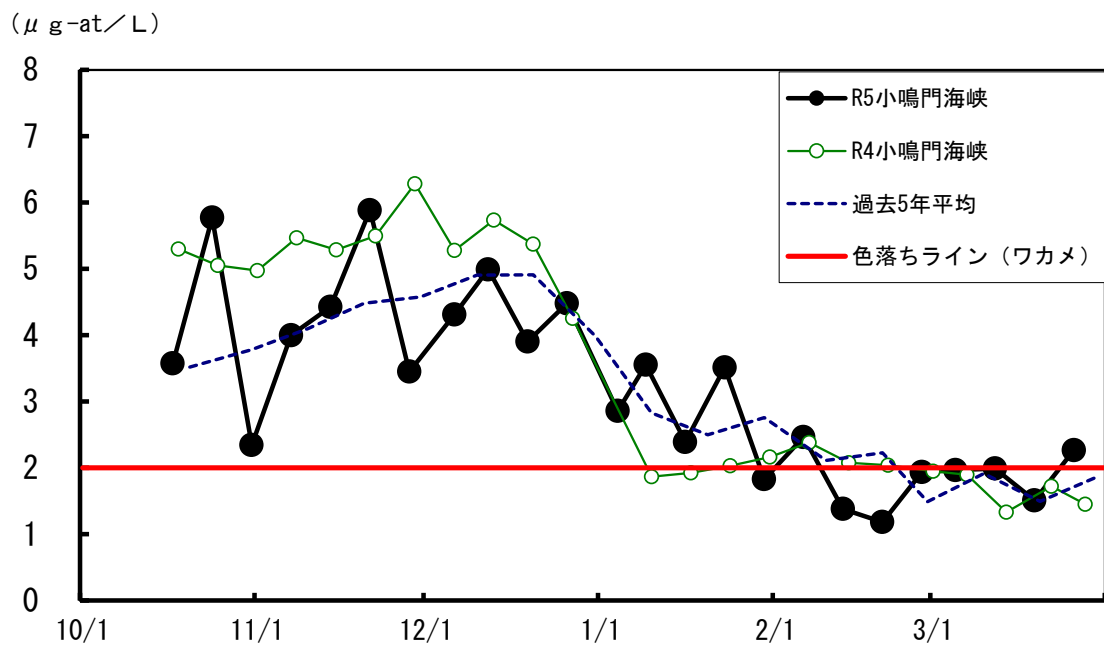


図 2. 水産研究課鳴門庁舎地先の DIN 濃度の推移